外れスキル持ちの天才錬金術師

hazure skill mochi no
tensai renkinjutsushi

神獣に気に入られたのでレア素材探しの旅に出かけます

3

著 蒼井美紗 Misa Aoi

ill. 丈ゆきみ Yukimi Take

CHARACTERS

レイラ
剣術に長け、騎士団の小隊長を務めている。
デュラ爺
異空間魔法が使える神獣。物知りでみんなのお爺ちゃん的存在。
スーちゃん
鑑定と空中歩行の能力を持つ神獣。強気で高飛車。好物は魚。
フィーネ
神獣を呼び出せるスキル「神獣召喚」を持つ。エリクをパーティーに誘う。
ラト
木の実が大好物な食いしん坊の神獣。いつも元気でおしゃべり。
エリク
本作の主人公。触れた素材が変化する特殊なスキル「素材変質」を持つ。そのせいで錬金工房をクビになり、冒険者として生きることに。
リルン
鋭い爪の攻撃と風魔法が得意なフェンリル。実はツンデレ。

プロローグ

素材変質スキルという優秀だが厄介なスキルを手にした俺は、神獣召喚スキルを持つフィーネとパーティーを組み、可愛い神獣たちとともに冒険者として旅をしていた。

今はスキル封じの石を錬金するために素材を集めているのだが、現在集まったのは星屑石と朱鉄の二つのみ。残りは水晶華、純黒玉、神木の葉だ。その三つの中でも水晶華があるらしい海岸の洞窟に行くため、運良く船を貸してもらえることになったのだが――

「大きいな」

「凄いね……」

現在の俺たちは、アルフさんと約束していた日時に港へと来ていた。

アルフさんが遭難していたところを助けたお礼として船を貸してもらえることになったから、割としっかりした船を借りられるんじゃないかとは思ってたけど……この大きさは想定外だ。

リルンが動かすと張り切ってたから頑丈な船をお願いしたけど、さすがにやりすぎだと思う。

だって数十人は余裕で乗れそうな……いや、もしかしたら百人ぐらい乗れるんじゃないかってくらいデカい船なのだ。

大きい船なので直接飛び乗ることもできず、梯子のようなものを使って登らないといけない。
「これは、アルフさん所有の船なのですか？」
俺が疑問に思っていたことをフィーネが聞くと、アルフさんは苦笑を浮かべつつ首を横に振った。
「さすがにこの大きさの船を個人で所有はできませんよ。これは、街の漁業連合が所有している船なんです。今回の経緯を説明したら快く貸してもらえました。とても頑丈な船なので、安心してください」
「わざわざ借りてくださったのですか！　ありがとうございます」
フィーネが驚きを露わにして感謝を伝えると、アルフさんは「いえいえ」と両手を振る。
「気にしないでください。お二人は命の恩人ですから。これでお礼になるといいのですが」
「とてもありがたいです」
俺もそう伝えると、フィーネも笑みを深めた。
「本当に助かります」
そうして俺たちが話をしている間に、デュラ爺たち神獣組は、すでに船へと乗り込んでいた。
自由な動きに、思わず口調に呆れが滲んでしまう。
「皆、船の備品とか壊すなよ！」
『もちろんじゃ。問題ないぞ』
『心配いらない』

『エリク！　凄い船だよ！』
『私が乗るのに相応しいわ』
皆は一応返答してくれたが、全く信頼できなかった。そもそも神獣と人間は、やっぱり価値観が違う部分も多いのだ。
それにデュラ爺とリルンはまだしも、ラトとスーちゃんは全く俺の話を聞いてないだろ。
「エリク、私たちも早く乗ろうか」
苦笑を浮かべたフィーネにそう言われ、俺はすぐに頷いた。
アルフさんに乗り方を教えてもらい、問題なく船上に上がることができた。
「おお……」
ちょっと、ワクワクするかもしれない。
壮大な冒険が始まりそうというか、普通なら乗れないような船に、神獣たちじゃないけど心が浮き立つ。
「簡単な使い方だけお伝えしますね。船の固定の仕方が分かると便利だと思うので」
「ありがとうございます」
それから数十分かけて必要な船の扱い方だけ教えてもらい、アルフさんは船を下りた。あとは出発するだけだ。
遭難したアルフさんたちを助けたということで話題になってるらしい俺たちを一目見るためか、

港には多くの人たちが集まっている。
「気をつけろよー！」
「アルフたちを助けてくれてありがとな！」
「お前らはすげぇぞ！」
そんな声をたくさんかけられ、俺とフィーネは大きく手を振った。船の大きさも相まって、なんだか長期間の船旅に出るぐらいの盛大な見送りだ。
遅くとも数日以内には帰ってくることを考えると、少しだけ恥ずかしい。
『では行くぞ』
楽しげな声音でリルンがそう告げると、次の瞬間には船が動き出した。
リルンの風魔法によって、普通ならあり得ない加速をしながらどんどん進んでいく。そして俺たちは、あっという間に再び沖に出ていた。

第一章　水晶華の採取へ

出発した時は、船首にドヤ顔で立ってやる気満々なリルンに嫌な予感がしていたが、船旅は意外にも快適に進んでいた。
「気持ちいいな～」
『速いね！』
『乗り心地がいいわ』
リルンは速度を出すことよりも、これほど大きな船を自由自在に動かせることの方がとにかく楽しいらしくて、あまり無謀な動きをしないのだ。
これは予想外の幸運だった。
とは言っても、多分この速度って普通の船と比べたらかなり速いんだと思うけど。
気持ちいいのは確かだけど、ずっと風に当たってると疲れる。でも、景色を楽しむ余裕はギリギリある、ぐらいな感じだ。
改めて、神獣たちの能力は本当に凄いと思う。
「リルン、凄く楽しそうだね」

俺の隣にやってきたフィーネが優しい表情でそう言った。
リルンのことを見つめるフィーネの横顔を見て、俺の頬も緩む。
「そうだな。リルンは船にハマるかも」
「ふふっ、あり得るね。スキル封じの石を無事に錬金できた後の予定は決めてないけど、海とか大きな湖を目指すのもありかな」
「それ楽しそうだな。スーちゃんも魚が好きだし喜びそう。ただ、ラトの木の実は多めに確保しておかないと」
船上ではさすがに木の実を手に入れられないから。
「確かに。大切だね」
「あとはデュラ爺の肉とリルンのパンも」
「ふふっ、たくさん準備しなきゃ」
フィーネと笑いながら話しているのがとても楽しい。
そんな中で、フィーネがリルンに声をかけた。
「リルン、あんまり沖に出すぎないでね」
こちらをチラッと振り返ったリルンは、やはり楽しそうに進行方向を変える。
『任せておけ』
陸地に近すぎる場所を大きな船で進むのは危ないらしいのだが、陸から離れすぎても遭難の危険

があるし、無駄に時間がかかってしまうそうだ。
アルフさん曰く、海のどこを通るのかは、経験と腕が試されるらしい。
その話を聞いていたリルンは挑戦的な表情を浮かべていたので、そのうち安全に、そして自由自在に航海できるようになるかもしれない。
今度、船に関する本とかを買ってあげるのもいいのかも。
「そういえば、洞窟までってどのぐらいかかるんだ？」
ちゃんと聞いてなかったと疑問を口にすると、それには近くにいたデュラ爺が答えてくれた。
『この調子なら、あと三時間ほどで着くじゃろうな』
「そんなに近いのか」
予想よりかなり早くて驚く。
『いや、それほど近くはないのだぞ。リルンが飛ばしておるからじゃ。先ほどまでいた港街から陸路で向かえば、何日もかかったじゃろう』
じゃあ、船で行くことでかなりの時間短縮になってるんだな。
「リルンに感謝だな」
「そうだね。それに船を借りられて良かった」
フィーネの言葉に大きく頷く。
船は借りたいと思っても簡単に借りられるものじゃないだろうし、本当に幸運だった。

ただ三時間か……何もしないで過ごすには長いな。
ぼーっと海を眺めていると、船を借りる時にスーちゃんが言っていた言葉を思い出した。
「釣りをするか」
俺のその言葉に、皆が反応する。
特に大きく反応したのはスーちゃんだ。
『もちろんするわ』
そう言ってさっそく海を覗き込んでいる様子がとても可愛い。
『どうやるのがいいかしら。デュラ爺、何かいいものはある？』
『そうじゃな……』
それからはデュラ爺とスーちゃん、ラトが中心となって準備を進めた。リルンは釣りよりも船を動かす方が楽しいみたいで、こっちには参加しないようだ。
俺とフィーネが三人の作業を見守っていると、魚が寄ってきやすいように少し加工した蔦を使うことにしたらしい。
その蔦をデュラ爺が海に垂らして、寄ってきた魚を蔦で巻いて捕まえるそうだ。
『早くやろ！』
『たくさん獲るわよ』
『もちろんじゃ』

それを釣りと呼んでいいのかはさておき……皆が楽しそうだからいいか。
俺は開き直って、皆と一緒に楽しむことにした。
「この辺にはどんな魚がいるのかな」
フィーネの言葉に、デュラ爺が答える。
『多様な魚がいるじゃろうな。ただ陸地に近いと、基本的には小ぶりな魚じゃろう。やはり巨大魚は深い場所にいることが多いんじゃ。例外はあるがな』
『それなら数を獲らないとダメよ』
『いっぱい獲ろうね！』
『うむ、頑張ろうぞ』
楽しそうなスーちゃんとラトに、デュラ爺は優しい笑みを浮かべていた。
なんだかデュラ爺、名前の通り本当に皆のお爺ちゃんって感じだ。俺までデュラ爺の存在に和んでしまう。
お爺ちゃんと孫が海釣りに来てるみたいな……
『おっ、魚が近づいてきたぞ』
デュラ爺の言葉にスーちゃんとラトの目が輝いた。
『デュラ爺、頑張れ！』
『頼んだわよ。絶対に逃がさないで』

鷹揚に頷いたデュラ爺の視線の先を追っていると……少しして、蔦が巻きついた手のひらサイズの魚が海面に姿を現した。
そのまま蔦が意志を持つように動いて、魚は船の上に揚げられる。
『これ、美味しいお魚だわ！』
スーちゃんは大興奮だ。
ラトもデュラ爺の頭上で飛び跳ねて喜んでいる。
『凄い凄い！』
俺たちも本当に釣れたことでテンションが上がった。
「この調子で魚が獲れるなら楽しいな」
「ね。蔦の棘を上手く加工するだけで、魚は逃げられないんだね」
フィーネは魚に巻きついている蔦を興味深そうに眺める。
「考えられてるな」
ただ、構造的に蔦が自ら魚に巻きつくからこそ、その棘が有効的に作用してる感じだ。つまりこれを使うには、デュラ爺の植物魔法が必要になる。
フィーネもすぐそのことに気づいたのか、蔦の観察はやめて、デュラ爺が異空間から取り出した大きな容器の蓋を開けた。
そこにデュラ爺が魚を入れて、さらに蔦を上手く操って器の形にすると海水も汲み上げる。

『この容器を魚で満たそう。目指せ大漁じゃ』
そう宣言したデュラ爺の声音はいつもより弾んでいた。
デュラ爺も釣りを楽しんでいるらしい。
その様子に俺たちは笑顔になり、ラトとスーちゃんもさらにやる気を高める。
『頑張ろー！』
『美味しいお魚を大量確保よ！』
そうして釣り……のような魚取りを皆で楽しんでいると、あっという間に目的地である海岸の洞窟近くに到着した。

『着いたぞ』
リルンから声をかけられて近くの陸地に視線を向けると、確かに洞窟のようなものが見える。
完全に海側へと開かれている洞窟で、陸地側から入るのは相当に大変だろう作りだ。
「あの洞窟の中に水晶華があるのか。これは海側から来られて良かったな」
「陸地からだとかなり大変だったかもね。でも、どうやって中に入ろう」
リルンが船を停めたのは、洞窟まで数百メートルはある場所だ。この辺は陸地に近づくと海底が浅く岩場になり、船は近づけないらしい。
「うーん、何か梯子みたいなものをかけられないか？」

「それとも、泳いで向かう？」
フィーネが悪戯な笑みを浮かべて、大胆な提案をした。
泳いでいくのは――
「さすがに無理じゃないか？」
海には魔物がいるのだ。
俺の返答を聞いたフィーネは、なんだか楽しそうに笑っている。
「ふふっ、だよね。泳いだら気持ち良さそうなんだけど」
「フィーネって泳げるんだ」
「うん、湖では結構泳いだりしたこともあるんだ。エリクは？」
「俺はほとんど経験ないな。溺れる未来しか見えない」
「そしたら、私がエリクと一緒に泳いであげる」
その言葉で俺は、ついその光景を脳内に思い浮かべてしまった。一緒に泳ぐってことは、密着するしかないわけで、さらに服は濡れて――
俺は思いっきり頭を横に振って、変な想像を霧散させた。
フィーネに絶対からかわれてる。これはほぼ故意だ。
「泳ぐのは却下な」
フィーネをじっと横目で見つめながらそう伝えると、フィーネはペロッと舌を出して笑った。一

緒にいる時間が長くなるにつれて心を開いてくれるのは嬉しいけど、凄く心臓に悪い。
俺はドキドキとうるさい心臓をそっと押さえながら、別の案を考えた。
「やっぱり梯子か、皆の力を借りる形でどうにか……」
そこまで呟いたところで、スーちゃんが船の手すりに飛び乗る。優雅にこちらを振り返ると少し自慢げに告げた。
『しょうがないわね。私が採ってきてあげるわ』
「え、スーちゃんが？　でもどうやって……」
『足場となる岩がたくさんあるじゃない。これなら簡単に洞窟まで行けるわ』
なんの気負いもなくそう言ったスーちゃんは、タッと手すりを蹴って宙に飛び出してしまう。
そんなスーちゃんをハラハラしながら見守っていると、宙を三回まで連続で蹴ることができる空中歩行を駆使して、海面に突き出ている小さな岩場を辿るように危なげなく洞窟に向かった。
「スーちゃん、身軽だな」
「でも大丈夫かな。洞窟の中に魔物がいたりしない？」
俺が呆然と見送り、フィーネが心配そうに眉根を寄せている間に、スーちゃんは洞窟の入り口に降り立つ。
そして、こちらを少しだけ振り返ると、躊躇いもなく中に入ってしまった。
大丈夫なんだろうか。スーちゃんが弱いと思ってるわけじゃないけど、リルンやデュラ爺より攻

撃力の面では劣るだろうし、体も小さいし……
心配がグルグルと脳内を巡っている間に、スーちゃんは洞窟の中から無事に戻ってきた。
「あ、良かった」
思わず安堵の言葉がこぼれてしまう。
その足取りはしっかりとしていて、怪我などをしている様子はなさそうだ。
「スーちゃん、大丈夫か～？」
思わず声を張って問いかけてしまったけど、スーちゃんは答えることなく、行きと同じように岩場を辿って船まで戻ってきた。
そんなスーちゃんの口には、ガラスで作られたような綺麗な花が咥えられている。
『エリク、手を出しなさい』
俺がそっと両手を差し出すと、スーちゃんは手の上に、おそらく水晶華だろう花を置いた。
それは――変質しない。
『ほら、これが水晶華よ。ちゃんと鑑定もしたんだから、感謝しなさい？』
スーちゃんは少し得意げだ。
「スーちゃん、本当にありがとう。凄いな！」
「助かったよ。ありがとう」
俺はテンション高く、フィーネは穏やかに感謝を伝えた。

するとスーちゃんは、恥ずかしそうにそっぽを向く。
『べ、別に、できることをやっただけよ。まだたくさんあったから採ってくるわ』
照れ隠しなのかすぐに洞窟へと戻ってしまったスーちゃんは、また一輪の水晶華を咥えて戻ってきた。洞窟に入って遅くとも数分後には出てくるから、水晶華は海側からだとすぐの場所に咲いているみたいだ。
『どのぐらい必要なの？』
五つ目を採取してきたところでスーちゃんに問いかけられ、俺は悩みつつデュラ爺から聞いていたスキル封じの石を錬金する工程を思い出した。
確か水晶華は、一度の錬金に一つ使うんだ。
錬金の工程はデュラ爺が細部まで知らなかったことから、何度も失敗して正解を模索していく作業になると思う。
そうなると、できる限り多くの水晶華が欲しい。
「洞窟の中には全部でどのぐらいの水晶華が咲いてるんだ？」
『そうね……千ほどかしら。もう数えられないわよ』
「そんなに！」
想像の何十倍も多かった。
それは咲いてる光景を見てみたいし、スーちゃんにだけ採取を頼むのは酷だな。全部を採取しな

いにしても、多めに採っておきたいから。
「それだけあるなら、五百は採っておきたいな」
となると――やっぱり俺たちが向こうに行きたい。
「デュラ爺、リルン、ラト、何かいい案はないか？　全員で洞窟に行きたいんだ」
魚取りにハマったらしく蔦の改良を二人でしていたデュラ爺とラト、さらに船に乗れたのが相当嬉しいようで船内を見て回っているリルン。そんな三人にも協力を求めた。
すると、まずはリルンから口を開く。
『我の跳躍力でも洞窟まで跳ぶのは難しいな。足場が少なすぎる』
やはりスーちゃんは空中歩行があるからこそ、身軽に向こうまで行けるらしい。
『僕はスーちゃんの背中に乗せてもらえば行けるかなぁ。でも皆を連れていったりはできないよ』
ラトもそう答えた。
となると、最後の望みはデュラ爺だ。
『そうじゃな……やはり植物船が一番じゃろうか。わしが植物魔法で足場を追加することでリルンは洞窟まで跳べるようになるじゃろうが、背中にエリクやフィーネを乗せると、どうしても跳躍力は下がる。そう考えると、植物船が一番無難じゃろう』
そうだ、植物船のことを忘れていた。
確かにあれなら、全員で問題なく洞窟まで行けるだろう。ただ植物船には全くいい思い出がない

からな……
躊躇いそうになったが、洞窟に向かう方法があるだけ恵まれていると自分に気合を入れて、デュラ爺に頼んだ。
「デュラ爺、頼む。植物船で向こうまで行きたい。……フィーネもそれで大丈夫？」
「もちろんだよ。デュラ爺、お願いできる？」
フィーネもそう伝えると、デュラ爺は鷹揚に頷いた。
『もちろんじゃ。前回作った植物船は異空間に収納してあるから、それを使うぞ。さすがにまだ枯れてないじゃろう』
おお、嫌な記憶が蘇る。
俺は苦笑しつつマイナスなことは考えないようにした。今回はすぐそこまで行くだけだから大丈夫だろう。
さっそく……と思ったところで、デュラ爺が言葉を続けた。
『ただ向こうに着いても、海面から洞窟の入り口までは結構な高さがあるぞ。わしは採取されて時間が経った植物を動かすことはできないから、植物船の植物を操ってエリクたちを入り口まで持ち上げるのは無理じゃ。洞窟の周囲は岩場で、ちょうど良い植物もなさそうじゃし……』
そう言って考え込んでしまったデュラ爺に、俺は首を傾げながら問いかける。
「向こうで鉢植えの植物を使うのはダメなのか？」

『それでもいいんじゃが、鉢植えを置く場所が植物船の中となると、体を持ち上げる時にかなり揺れることになると思うぞ。それでも構わんか？』
かなり揺れる……俺的には心から遠慮したいけど、さすがにそんなわがままを言える状況じゃないことは分かっていた。
「耐えるから大丈夫だ」
「私も問題ないよ」
『では、そのようにして洞窟まで行こう』
デュラ爺がそうまとめると、さっそくラトは嬉しそうにデュラ爺の頭の上に乗る。
『やったー！　早く行こ！』
ラトはスリルが好きなので、植物船での移動が嬉しいのだろう。
『待て。船を固定してからだ』
リルンはやっぱり船が第一らしい。
ただ借り物の船なので、俺たちにとってはその方が安心できる。
アルフさんに教えてもらったように船の固定をしたところで、スーちゃんの小さな呟きが聞こえてきた。
『私が行く必要なかったわね』
表情は少し拗ねているようだ。

そんなスーちゃんを、俺は思わず抱き上げてしまう。
「そんなことない。スーちゃんが先に洞窟に行ってくれたから、確実に水晶華があることを確認できたんだ。それに安全性もな」
その言葉を聞いたスーちゃんは照れたように顔を背けると、少し強い声音で言った。
『そ、それなら良かったわっ。と、というかね、早く下ろしなさいよ！』
「ははっ、分かったよ」
そうして皆で洞窟へと向かうことになり、俺たちはもう乗りたくないと思っていた植物船に全員で乗り込んだ。
植物魔法が適用されるのは採取前の植物、または採取からあまり時間が経っていない植物のみに限定されるので、植物船の入り口はもうデュラ爺の魔法では開けられない。
そこで上部を物理的にこじ開けて、入り口を作った。
結構な高さなので意を決して植物船の中に飛び降りると、海の上で不安定な足場のため着地は失敗し、派手に転がってしまう。
「うぅ……」
呻きながらフィーネが下りてくる場所を空けると、フィーネはリルンの背中に乗って身軽に下りてきた。
「俺もそれが良かった……！」

『エリクの様子を見て思いついたのだから仕方ないだろう？　最近は忙しくて鍛錬をしていない時もあると思うが、もっと鍛えた方がいいぞ』
リルンにそう言われてしまうと、何も言い返せずに言葉に詰まる。
確かに最近は色々と忙しくて、前ほど鍛錬に時間を割けていなかった。いくら神獣の皆が強いと言っても、ちゃんと俺も頑張らなきゃな。
腰に差してある剣に触れながら、改めて決意した。
全員が乗り込んだところで、さっそく植物船を動かすことになるのだが、今回はリルンではなくデュラ爺が動かすことになった。鉢植えに植えられた蔦を使って、近くの岩場に巻きつけて植物船を引っ張る形にするのだ。
リルンの風魔法は、こういう狭い場所での移動にはあまり向かないらしい。
『こうして渡ればすぐじゃな』
あまり速度を出さない移動は快適で、俺はホッと胸を撫で下ろした。
すぐに洞窟の真下に辿り着き、あとは上に上がるだけだ。
『エリクとフィーネ、どちらから行く？』
デュラ爺に問いかけられ、俺は先に手を挙げた。
こういうのは最初の方が危ないから、先にフィーネにやってもらうわけにはいかない。
「俺から……」

口を開きかけたところで、リルンが目に入った。
「あっ、リルンも蔦に乗っていく？」
スーちゃんは自力で登れるだろうし、ラトも瞬間移動ができる。あとはリルンだと思って問いかけると、リルンはふんっと荒い鼻息で自慢げに告げた。
『我はこの場所からなら、洞窟の入り口まで登るなど造作もない』
そう言ったリルンはいくつかの岩が突き出した場所を足場にして、ひょいひょいっと身軽に登ってしまった。
スーちゃんもその後に続き、ラトは瞬間移動でリルンの背中に着地する。
「やっぱり神獣は凄いな……デュラ爺もここからなら登れるのか？」
『そうじゃな。わしにも可能だろう』
「じゃあ、俺たちだけだな。よろしく頼む」
「エリク、頑張って」
笑顔で応援してくれるフィーネは凄く可愛いけど、付き合いが長くなってきた俺には分かった。フィーネは先に行く方が危ないと分かっていて、あえてそれを口にしていない。
まあ、俺はそれを分かってて先に行くからいいんだけど。
フィーネのこういう態度にもちょっと嬉しくなってしまう自分に微妙な気持ちになりつつ、デュラ爺に視線を向けた。

『では行くぞ』
「ああ、よろしくな」
デュラ爺が操る蔦が椅子のようになって俺の体を支える。さらに体を安定させられるように、体の前に掴める蔦を固定してくれた。
俺がしっかりと蔦を掴んだところで……ぐいっと体が持ち上げられる。
「うわっ」
不安定な植物船の上でやっているので、ふらふらと蔦が左右に揺れた。
「っ、おお……」
これは確かに、かなり不安定だ。
思っていた以上に揺れて、少し驚いてしまった。上に行くほどバランスが悪くなるからか、蔦の揺れが酷くなる。
でもあと少しだけ。もうちょっとで地面に手が届く。
そう思って安心した瞬間、突然手が届きそうだった地面が遠ざかった。
「え……っ」
お、落ちてる⁉
俺はどうすることもできずに、固く目を瞑って蔦を握る手に力を入れる。
このままだと海に落ちるよな？　岩場にぶつかったり⁉

というか待って、俺泳げないし、魔物に襲われたら‼
「ぐへっ」
内心で大混乱していたら突然蔦が止まり、俺は掴んでいた蔦に思いっきり腹部を押された。恐る恐る目を開けると、青い海の目前で体が止まっている。
「た、助かった……」
一気に安堵して体から力が抜けた。
鼻先が海にぶつかる寸前から、少しずつ体が上へと戻っていく。
『エリク、すまないな。植物船がひっくり返りそうになったのじゃ。固定を増やしたからもう心配はいらない』
「そっか、それなら良かった……」
正直怖かったけど、この失敗を糧にして、フィーネの危険がなくなったのならそれでいい。
俺は内心でそんな虚勢を張って、まだドキドキとうるさい心臓とともに蔦に運ばれた。
今度こそ無事に洞窟の入り口に着地することができたところで、つい地面にしゃがみ込んでしまう。
『エリクのビューンってやつ、楽しそうだったね！』
しゃがみ込んでる俺の顔を覗き込むように、ラトがそう告げた。
ラトの目はキラキラと輝いていて、とても嫌な予感がする。

「いや、全く楽しくないからな」
『え、本当？　すっごく楽しそうに見えた！』
「あれは楽しいじゃなくて怖いだ」
『怖いって楽しいってことだよね！』
ラトの感覚はどうなっているのか。なんでこんなに小さくて可愛いのに、スリルが好きなんだろう……
そんなことを考えていると、フィーネに続いて登ってきたデュラ爺が口を開いた。
『では、帰りにラトも体験するか？』
『本当⁉　やりたい！』
小さな手を持ち上げたラトは満面の笑みだ。リルンの背中からデュラ爺の頭に飛び移り、嬉しそうに尻尾をピンッと立てる。
『楽しみだな～！』
ひたすら楽しそうなラトは可愛いけど、一緒にやろうと誘われても絶対に断ろう。俺は固くそう誓った。
「じゃあ、中に行こうか」
「そうだな」
全員で洞窟の中に入ると、そこに広がっていた光景は予想を遥かに上回るものだった。

「なんだこれ……」
言葉を失うとはこのことだろう。
あまりにも美しく神秘的な光景に、洞窟の入り口から奥に足を踏み入れることすら躊躇ってしまった。
「綺麗、だね」
「ああ、凄いな」
無数と言っても過言ではないほど洞窟全体に咲く水晶華はキラキラとした光を放っていて、本来なら暗いはずの洞窟内を神秘的な光で照らしている。
洞窟の壁面も普通の岩や土壁ではなく、つるりとした質感のようだった。
『ピカピカだねー！』
『もの凄い数だな』
『やはり水晶華は綺麗じゃな』
『私に相応しい光景よね』
ラト、リルン、デュラ爺、スーちゃんの順に感想が聞こえてくる。
さすがにこの光景には皆も感動してるみたいだ……と思っていると、すぐにリルンが思わずズッコケそうになることを言い始めた。
『しかし、いくら綺麗でもパンには劣る』

『確かに……木の実みたいに食べられるわけじゃないもんね』
いやいや、これをパンや木の実と比べるのは絶対に違うって！　そう思ったけど、突っ込む気力が起きずに力が抜けてしまった。
スーちゃんとデュラ爺はなんの躊躇いもなくさっそく水晶華の採取を始めてるし、俺とフィーネも皆の後に続くことにした。
「皆は綺麗な景色よりも美味しいものみたいだね」
「そうだな。確かに分かるけど……もうちょっとこう、感動して欲しい」
「ふふっ、分かる」
そんな話をしつつ、フィーネも遠慮なくパキッと水晶華を採取し始めた。若干この光景を壊すのに躊躇いを感じつつ、俺も切り替えて採取だ。
「力を入れるのがちょっと怖いな」
凄く繊細な見た目だから、力を入れるだけで割れてしまいそうに見える。しかし、勇気を出してパキッと採取をすると、見た目とは違う頑丈さがすぐに分かった。
思ったより採取するのは簡単で、茎以外の部分はかなり頑丈みたいだ。
「意外と硬いんだな」
「ちょっとびっくりだよね。繊細な見た目なのに」
「これは、錬金するには難しいかも」

細かく砕くにしても、かなりの力が必要そうだ。硬いものの扱いについて、復習しておいた方がいいかもしれない。
ただ鑑賞品として飾っておくなら、これ以上のものはないだろう。割れにくくて壊れにくいのに繊細に見えて最高に綺麗な水晶華。
――売れそうだ。
素直にそう思ってしまった。

それからもしばらく採取を続けていると、普通とは違う洞窟の壁が気になった。
「この壁も、錬金に使えたりするのかな……」
思わずそう呟くと、スーちゃんが衝撃的な言葉を口にする。
『鑑定してみたら、この壁が水晶華の根や茎のような役割をしているらしいわ。もしかしたら、持ち帰れば水晶華の栽培もできるんじゃない？』
「……え、マジか！」
俺はかなり驚いてしまった。
それって凄い事実なんじゃないだろうか。もし栽培に成功したら、それだけで億万長者になれそうだ。
そもそもデュラ爺の話しぶりから察するに、水晶華はどこにでもあるものじゃなく、この大陸ではこの洞窟にしかないぐらい希少なのだ。
そしてこの洞窟に、他の人が入った形跡はない。
陸地からここに辿り着くのは難易度が高いらしいし、海からの上陸も難しいから、わざわざ洞窟の中を確認しようとする人はいないはずだ。つまり、俺たちは水晶華を独占できる上に、栽培までできるかもしれない……
考えるだけで楽しくなってしまった。別にお金に困ってるわけじゃないし、これからも皆と冒険をしている限りは困らないだろうけど、こういうのに心が浮き立つのはどうしようもないのだ。どうしても心は庶民である。
それに商売的な観点を抜きにしても、錬金素材として優秀だろう水晶華を栽培できたら、錬金術師として凄く嬉しい。
とりあえず、試してみない手はないな。
「壁も持ち帰ってみるよ。ただどうすればいいのか……スーちゃん、どのぐらいの厚さが必要とか分かる？」
そう問いかけると、スーちゃんは首を横に振った。
『それはさすがに、私の鑑定でも分からなかったわよ。多分普通の壁と質感が違うところまでじゃないの？』
「確かにそうだな。スーちゃん、ありがと」

俺はスーちゃんにお礼を言ってから、少し離れたところで寝そべって休んでいたリルンに声をかける。
「リルン、ちょっと手伝ってくれないか？」
『なんだ？　我はもう採取は飽きたぞ』
「採取じゃなくて壁をくり抜いて欲しいんだ。ほら、リルンぐらいの力がないと難しいから」
リルンにやる気を出してもらうためにそう伝えると、予想通りリルンはすっくとその場で立ち上がり、ドヤ顔で俺の元へやってきた。
『仕方ない。我の力を貸そうではないか』
「ありがとな」
笑いを堪えつつリルンの背中を軽く叩いて、洞窟の入り口から目立たない場所の壁を示す。
「あの辺にしよう。普通の壁とは違う質感のところまでで、そうだな……俺が両手を広げたぐらいの範囲をくり抜いて欲しい。できるか？」
『うむ、任せておけ』
リルンは鋭い爪を構えると、まずは壁に深く縦線を入れた。
俺は綺麗に入った割れ目に感動していたが、リルン的には納得がいかなかったらしい。不満そうに壁に近づく。
『この壁は予想以上に硬いぞ。我の爪があまり刺さらん』

「そうなのか？　俺の目には十分な深さまで爪が入ったように見えるけど」
『よく見てみろ。割れ目の一番奥も、まだこの特殊な材質の壁だ』
リルンに言われてじっと覗いてみると、確かにその通りだった。予想以上に深くくり抜かないといけないかもしれない。
「大変だな……壁は諦めるか、浅い箇所だけ持ち帰ってみるか」
対策をぶつぶつと呟いていたら、リルンから「ふんっ」と鼻息が聞こえてきた。
『我は無理だとは言っていない。一度で難しければ、何度も試せばいいのだ』
そう言ったリルンは意地になったのか、何度も何度も壁に向かって爪の攻撃を放つ。そのたびにガキンッという硬い音が、洞窟内に響き渡った。
それからリルンが格闘すること十分ほど、繰り返した攻撃をまた放つと、その瞬間にガタンッと何かが落ちるような、派手な音が耳に入った。
『む？』
明らかに、先ほどまでの硬い音とは違うものだ。
その音の正体を探ろうと壁にじっと視線を向けた、その瞬間。俺の方に倒れてくるリルンがくり抜いた巨大な壁が、視界いっぱいに広がった。
「……っ！」
あまりにも突然の出来事に声も出せなかったが、日頃の鍛錬の成果か体だけは無意識に動く。床

を蹴って体勢を低くし、滑るように壁から離れ――
ドンッ!!
大きな衝撃音とともに爆風が体を襲った。
しかし、どこにも痛みはない。
恐る恐る壁があった方に目を向けると……俺の足のほんの少し先に、倒れた壁があった。
「あ、危なかった……」
思わずそう呟くと、俺の近くに来たリルンがいつも通りに呑気な口調で言う。
『エリク、意外と動けるではないか。鍛錬の成果だな』
「いや、それはそうだけど、体が動かなかったらどうなってたか……」
考えたくもないもしもを考えてしまい、冷や汗が流れた。しかしリルンはなんでもないことのように告げる。
『その時は我が助けていたから心配いらないぞ』
いつも頼もしいと思っているが、今回はいつも以上にリルンが輝いて見えた。
俺は思わずリルンのもふもふの体に抱きつく。
「ありがとな～」
『ちょっと、何をしているのだ！』
「たまにはいいだろ」

『良くないぞ！　我に抱きつくにはパン十個を所望する！』
「それぐらい、いくらでも買ってやる！」
全く怯まない俺にリルンは諦めたのか、ため息が聞こえてきた。
そんな中で、フィーネたちが慌てて駆けつけてくる。
「大丈夫!?」
フィーネは必死の形相だ。
心配をかけてしまった申し訳なさが募る。
『怪我してない!?』
『エリク、大丈夫か？』
『凄い音がしたわよ？』
皆もかなり心配してくれているようで、俺は安心してもらえるように笑みを浮かべた。
「大丈夫だ。心配かけてごめん」
「良かったぁ……」
安心したように頬を緩めるフィーネに、俺は自分の胸が高鳴るのを感じた。
それを誤魔化すためにも、慌ててデュラ爺に声をかける。
「デュ、デュラ爺、この壁を異空間収納に仕舞える？」
『できるじゃろうが、この壁を持ち帰るのか？』

「ああ、スーちゃん曰く、これで水晶華の栽培ができるかもしれないんだ」
『ほう、それは興味深いな』
デュラ爺は目をキラリと輝かせた。
『では異空間に仕舞っておこう』
「ありがとな」
大きなトラブルは発生したが、壁の取得は成功だ。
俺は達成感に包まれながら、残ってる水晶華を確認しようと周囲を見回した。
すると、すでに十分な数を採取し終えているように見える。いつの間にか、かなり採取が進んでいたようだ。
「水晶華の採取もそろそろ終わりでいいか」
そう告げると、フィーネが頷く。
「そうだね。でももう外は薄暗くなってると思うけど、これからどうする？　今から帰るのはちょっと危ないよね」
「そうだな……いくら皆がいるとはいえ、夜の海は危険な気がする」
「じゃあ、今日はここで野営にしようか」
フィーネの言葉に、一番に反応したのはラトだった。
『今日は野営なの⁉』

その声音はとても嬉しそうだ。
ラトは瞬間移動でデュラ爺の頭上に現れると、キラキラと輝く目で見上げてくる。
「嬉しいのか？」
『うん！』
ラトは前から野営が好きだったけど、デュラ爺が仲間に加わって野営が快適になってからは、さらに大好きになったのだ。
ラトにとって野営は楽しいキャンプである。
ちなみに、俺も割と好きだったりする。ちょっとした非日常って感じで。
『どんな料理を作るのかしら。たくさん獲った魚を食べるのはどう？』
『この洞窟の中で野営をするのか？』
スーちゃんとリルンも乗り気だ。
全員の期待の眼差しを受けて、フィーネは苦笑しながら口を開いた。
「食事は洞窟の入り口で、寝るのは奥にしようか。夕食のメニューは魚を揚げたものと、木の実、それからデュラ爺の異空間にあるビスケットや堅パン、干し肉かな。堅パンは、バターを塗って火で炙るのはどう？」
『それは素晴らしい。すぐに夕食としよう』
パンならなんでも好きなリルンは一気に前のめりだ。スーちゃんは魚と聞いて満足そうで、ラト

は木の実、デュラ爺は干し肉に頬を緩めている。
『干し肉も炙りたいぞ』
「もちろん。さっそく準備しようか」
そうして野営をすることを決めた俺たちは、楽しそうな神獣たち皆とともに準備を始めた。
「スープも作ったらパンに合うかな」
「確かに。乾燥野菜があったし、それと魚介のスープにしたら絶対美味しいな」
想像しただけでお腹が空く。
俺たちはすっかり海鮮に魅了されているのだ。
「それも作ろうか」
俺は素材そのものに触れないので、すでに焼かれているビスケットや堅パンの準備、それから火おこしや鍋を見守る役などで野営準備に参加した。
俺ができることは全てやってるけど、やっぱり食材に触れないのは凄く不便だ。どうしてもフィーネの負担が増えるから、早くスキル封じの石を手に入れたい。
水晶華も問題なく採取できたし、あと必要なのは純黒玉と神木の葉の二つだけだが、全部集まったとしても難しい錬金をこなさなければいけないという最後の試練がある。
俺はスキル封じの石を錬金することができるのか……ちょっと心配だ。
「エリク、この魚と野菜を入れて煮込んでくれる？　味つけは任せるよ」

色々と考えていたらフィーネに声をかけられた。
今は野営を楽しもうと、難しいことは頭の片隅に押しやっておく。
「分かった。煮込んでる間にパンも焼き始めるな」
「うん。よろしくね」
フィーネからもらった食材を煮込み始めたところで、ナイフで切り分けた堅パンにバターを適当に塗って、鉄串に刺した。
さらにパンだけじゃなくて木の実、干し肉も刺していく。途中でフィーネが捌(さば)いてくれた魚も追加だ。
「皆、焼き加減を見てて欲しい」
神獣たち皆に伝えると、全員が張り切って返事をした。
『分かった』
『任せておきなさい』
『木の実は僕が見てるね！』
『もちろんじゃ』
全員が火を囲んだところで、俺は楽しそうな皆に癒されながら、またスープ作りに戻る。
その頃のフィーネは魚の揚げ物を作っていた。野営で揚げ物が食べられるなんて最高に贅沢(ぜいたく)だと思う。

『いい音がするわね！』
スーちゃんはかなり上機嫌だ。
それから少ししたところで全ての料理が完成し、夕食の時間となった。
『おおっ、炙った堅パンはかなりいけるな！』
さっそくパンにかぶりついたリルンは嬉しそうに尻尾を揺らしている。
『木の実もほくほくだよ！』
『干し肉はやはり炙ると美味いな。これを堅パンとともに食べると……最高じゃ』
『やっぱり魚は美味しいわ』
他の皆も全員が美味しそうに食べ進めていて、俺とフィーネは安心しながらまずはスープを口に運んだ。
「スープも美味いな」
「うん。味つけが良いね。さすがエリク」
ストレートに褒められて、少し照れてしまう。
「フィーネの食材選びと下拵えが良かったからだよ」
「ふふっ、ありがと」
堅パンをスープに浸して食べるとさらに美味しいし、サクサクと美味しい魚のフライを口にした後にスープを飲むと、油っぽさがリセットされていくらでも食べられそうだ。

それからも皆で楽しく夕食の時間を過ごし、全員のお腹が満たされたところで食事は終了となった。
『やはり綺麗なものもいいが、美味いものには敵わんな』
満足そうに寝そべりながらリルンが言った言葉に、皆が同意をする。確かに美味しいものを食べてると、水晶華の美しさに目が行かなくなるのは事実だ。
とはいえ、もう少し綺麗な景色にも感動して欲しいけどな……
「最近は魚料理が多いから、また美味しい肉料理も食べたいな」
最後に少し干し肉を食べたことで、ステーキのようなガッツリとした肉を思い出してしまい、思わずそう呟いた。
するとフィーネも同意する。
「確かにそうだね。黒山辺りは海沿いってわけじゃないから、お肉料理が増えるんじゃないかな。美味しいお店を見つけようか」
「そっか。じゃあ街に戻ったら、早めに黒山行きを考えよう」
タイミング良く黒山行きの馬車が予約できたらいいけど。
というか前に予約してから、随分と黒山まで遠回りしてるな。まさか先に朱鉄と水晶華を手に入れられるなんて、予定は未定とはこのことだ。
「黒山で探すのは純黒玉だよね？　簡単に採取できるのかな」

フィーネの疑問には、デュラ爺が答える。
『純黒玉は火口付近にあるものじゃから、大量に必要ならば山を登る必要があるな。少量なら麓まで落ちてきたものを拾うだけで良いんじゃが』
「火口か……それって危なくないのか？　確か黒山って温泉でも有名って話だったし、それだと火山活動が活発だったりするんじゃ」
そもそも山への立ち入りができるのか、山頂までの道があるのかも気になるよな……手つかずの自然の中に入っていくとなると、またいろんな危険がありそうだ。
『確かに火口の中に入ったら死ぬじゃろうが、純黒玉はあくまでも火口付近にあったはずじゃ。問題はないんじゃないか？』
「……そうか」
デュラ爺の言葉にまだ心配は拭いきれなかったが、とりあえず現地に行ってみなければ分からないと、今は深く考えないことにした。
そもそも全てが黒い山なんて、常識は通じなそうだ。
『ふぁ……』
色々と話していたらラトの眠そうな欠伸が聞こえてきて、俺たちは寝る準備を始めた。
洞窟の中とは言っても岩の上なので、いつもは地面にそのまま寝るリルンとデュラ爺にも布団を敷いてあげて、俺とフィーネは自分の寝袋、ラトとスーちゃんは小さなクッションのようなものに

横になる。
「じゃあリルン、デュラ爺、見張りは任せてもいいんだな」
二人が交代で見張りをしてくれるらしいので最終確認をすると、二人とも問題ないと頷いた。
『エリクたちは気にせず寝ると良い』
「リルン、デュラ爺、ありがとね。でも辛かったらいつでも起こして」
『うむ、その時には声をかけよう』
フィーネも二人に声をかけて、俺たちは横になる。
疲れていたのか、気づいたら眠りに落ちていた。

翌朝。朝日が昇るのとほぼ同時に目覚めた俺たちは、朝ご飯に軽く木の実やパンを食べて、街に帰る準備を進めた。
デュラ爺の植物魔法によって植物船まで下ろしてもらい、船に戻る。
その間にラトがデュラ爺の動かす蔦でスリルを味わいたがったので、デュラ爺はラトの体に蔦を巻きつけるような形でしっかり固定すると、水面ギリギリから一気に急上昇させたり、水面を素早く移動させたりと、ラトの要望に応えていた。
『デュラ爺、これ凄く楽しいよ！』
ラトはよくあれを楽しめるよな……大興奮のラトの声が聞こえてくるたび、遠い目をしてしまう。

俺は昨日、本当に死んだかと思ったのに。
というか振り返ると、昨日は海に落ちかけて、倒れてくる壁の下敷きになりかけて、二回も死の恐怖を味わっている。
「もうちょっと平和に生きたい……」
思わずそんな言葉を呟いていると、楽しそうに笑っているラトに声をかけられた。
『エリクも一緒にやろう!?』
「いや、俺はいいよ。ラトが満足するまで楽しんでくれ」
『そうなの？　でも一緒にやったら楽しいよ？』
ラトの可愛い声音と眼差しに、心臓をグッと掴まれた心地になる。
頷きそうになりながらも……俺はなんとか耐えて、首を横に振った。
「い、いや、やっぱりやめとくよ」
『そっかぁ～。じゃあデュラ爺、もう一回お願い！』
『分かった。ではいくぞ』
『うん！』
ラトが遊びを再開させてから、俺は大きく息を吐き出した。
頑張った、よく断った俺。可愛いラトに釣られて頷いたりなんかしたら、今頃激しく後悔していたはずだ。

内心で自分を褒めていたら、フィーネに声をかけられた。
「今かなり危なかったでしょ」
フィーネは俺の内心の葛藤（かっとう）に気づいていたらしい。
「ギリギリだった」
「ははは、やっぱりそうだよね。ラトは可愛いからね～」
「ラトにキラキラした眼差しを向けられると、なんでもやってあげたくなるんだよな」
「分かる」
二人でそんな話をしていたら、近くにいたスーちゃんが聞き耳を立てていることに気づいた。俺はフィーネにアイコンタクトをして、二人でスーちゃんに後ろから近づく。
そして――
「もちろんスーちゃんも可愛いからな」
「スーちゃんも大好きだよ」
後ろから抱きしめながらそう伝えると、スーちゃんは驚いたのかピンッと尻尾を立てながら飛び上がった。
俺たちからはすぐに離れてしまう。
『ちょっと、驚くじゃない！』
そう不満げに言いながらも、なんだか嬉しそうなスーちゃんに癒され、隣のフィーネに視線を向

けると……その顔が間近にあった。
「っ、ご、ごめん」
なんにも考えてなかったが、スーちゃんに同時に抱きついたらそうなるよな。
俺は一気にうるさくなった心臓の音を聞きながら、慌てて立ち上がる。すると、フィーネも立ち上がり、俺を見上げて告げた。
「別に謝る必要はないよ？」
そう言って微笑むフィーネの表情が意味深に見えるのは俺の願望なのか、それとも本当に俺にとって嬉しい理由があるのか。
何も反応できないでいると、フィーネは出発準備をしに戻ってしまった。
そんな俺たちのやりとりを見ていたらしいリルンがボソッと告げる。
『エリクは意気地なしだな。男らしくないぞ』
リルンの言う通りなのでなんにも反論できないが、とりあえずリルンをもふもふの刑に処しておいた。
『おいっ、なぜ我を撫でるのだ！』
それからも皆と戯(じゃ)れ合いながら準備を進め、まだ遊んでいるラトとデュラ爺を呼び戻そうと声を張る。
「おーい、二人とも～！」

俺の声かけに気づいたラトがこちらを向いた――その瞬間。
水面ギリギリで止まっていたはずのラトの姿が、突然水中から現れた巨大な何かによって見えなくなった。
「なっ！」
バシャーンという大きな音とともに現れたのは――巨大なホタテだ。
「ラト⁉」
ラトが巨大なホタテに食べられた⁉
俺はあまりにも突然の緊急事態に動揺しながらも、皆に素早く伝えた。
「ラトが巨大ホタテに！」
俺の言葉に皆がすぐ異常事態に気づく。
「デュラ爺！」
フィーネが慌ててデュラ爺に声をかけた。
『慌てるな。ラトは瞬間移動があるから問題ないじゃろう』
その言葉で、少し安心することができる。
しかし、まだあのホタテ？　がなんなのか分からないので、不安は拭いきれない。
「あれは魔物なのか？」
『うむ。ビッグスカロプという名じゃ。大きなホタテという認識で問題ないじゃろう。じっと身を

潜めていたのか、気配を感じられなかったな』
『我も気づけなかった……』
リルンが悔しそうだ。
神獣たちが気配を感じられないってことは、結構強いんじゃないだろうか。いや、海の中だから気配を感じにくいのか？
そんなことを考えていると、リルンが口を開く。
『あいつはかなり挟む力が強いんだったな』
『そうじゃな。例えば人間が腕などを挟まれたら、そのまま切断じゃ。中に閉じ込められたら、よほどの力がなければ出てこられないじゃろう。確か閉じ込められてから一日ほどで溶けて原形がなくなると……』
それ、ただの大きなホタテじゃないだろ！
ホタテは魔物の中ではかなり弱くて小さな、ただ美味しいだけの存在だったはずだ。確か水魔法を使って水中移動ができたり、弱い水流を放てるぐらいで……
『それにでかいやつは数メートルの大きさを持つ』
数メートルはさすがに大きすぎないか!?
「というか、ラトが戻ってこないな」
「大丈夫かな」

立ち読みサンプル
はここまで

もうビッグスカロプは海に戻ってしまっていて、どうなっているのか全く分からない。
心配が募る中で、デュラ爺が植物魔法を使って海中を捜索していた。
『ん？　ここはビッグスカロプの棲家（すみか）のようじゃな。どれがラトを食べたのか判断がつかないようじゃ……』
デュラ爺がそんな不穏な言葉を述べた瞬間、俺の肩に重みが加わった。
『戻ってきたよ～！』
なんだか呑気な声音でそう告げたのは、もちろんラトだ。
「ラト！」
大丈夫だと思っていてもやはり心配だったので、肩に乗ったラトをギュッと抱き寄せた。ちょっと海の匂いがするが、そんなのは気にならない。
ラトが無事で、本当に良かった。
「怪我はないか？　痛いところは？」
「ラトっ。無事で良かった！」
フィーネもラトに顔を近づけて喜んでいる。そんな俺たち二人にラトは笑顔で言った。
『大丈夫だよ！　ちょっとびっくりしたけどね～』
デカい魔物に食べられたのが、ちょっとびっくりした程度らしい。
逆にこっちの心労の方が大きい気がする。